

シブソンパンナーのタイ文字新聞とタイ族文化

Local Intellectuals and the Revival of Literacy Tradition
A Case of the Tai Language Newspaper in Sipsongpanna

イサラー・ヤーナターン*

Isra YANATAN

Traditional writing system of the Tai living in Xishuangbanna autonomous prefecture, Yunnan, shared similarities with those of other Theravada Tai regions outside China. Under China's minority language policy, it was reformed in the middle of the 1950s in an attempt to incorporate the Tai into China's multi-ethnic state. Since then, campaign to promote the reformed (new) script gradually led to its popularization and has become vital for daily life of the Tai until the present time.

During the Cultural Revolution (approximately between 1965 and 1979), throughout Sipsongpanna autonomous prefecture the reformed script had continuously been supported by the government whereas the traditional scripts, with strong religious affiliation, had been strictly prohibited. With government financial support, the "Nang suu phim sipsong panna" (Sipsongpanna newspaper) had been released since 1957 using the new script and has continuously been published until now. It was aimed to establish an effective tool for propaganda of the modernization among the Tai peasants in the rural areas. However, under the new minority language policy launched since China opened its door to the southern regions in the beginning of the 1980s, both traditional and reformed scripts have been revived actively in several public spheres by the local Tai intellectuals. I argue that the Tai language newspaper since then was no longer merely the tool for state propaganda, but also gradually became the cultural arena for expressing the reconstruction of Tai cultural identity.

This paper examines the cultural strategies of these local Tai intellectuals in the process of re-building Tai cultural identity via the Sipsongpanna newspaper. First is how they tried to bring back the traditional script into the newspapers as well as how to make use of the modern printing technology. Second is how they have utilized the newspaper as a printed media towards reproduction of the literacy tradition of the Tai.

I argue that the Tai language newspaper should be considered neither as merely the tool for state propaganda of the local development projects, nor as the newspaper in modern society in which readers are seeking daily news. Rather, it should be considered as a dynamic arena where state minority language policy is being negotiated by the local intellectuals in order to re-build the local cultural identity under changing socio-cultural situations.

1. はじめに

西双版纳傣族自治州は、現在の中華人民共和国

雲南省南部のミャンマー・ラオスと国境を接する地域にある。この地には、1950年以前にはシブソンパンナーSipsongpanna¹⁾というタイTai族²⁾の国

*名古屋大学大学院

があった。シブソンパンナーは、1950年に中華人民共和国の一部に組み入れられ（「解放」）、1953年には西双版纳傣族自治州となり、1955年に西双版纳傣族自治州と改名された。1956年には、タイ族がそれまで持っていた政治組織も改変させられた【《西双版纳自治州概況》編写組 1986:35-37】。シブソンパンナーのタイ族は、一定の自治権は与えられたが、中国の少数民族となったのである。中国の少数民族となったタイ族は、どのように自らの文化を継承し、それを位置づけなおし、発展させてきただろうか。

シブソンパンナーにおいてタイ族の「伝統的」文化を上から規制する動きとして、最も大きな影響があったのは、1966年から1976年までの文化大革命である。その時代には仏教は禁じられ、経典も含めてタイ文字で書かれた文書の多くは燃やされた。1970年代終わりになるとようやく、再び仏教の信仰が許されるようになった。1980年代後半からは対外開放が積極的に進められるようになった。1992年以降は観光開発が盛んにされるようになった【長谷川 2001:112-119】。そのような流れの中で、観光客に見せるためのタイ族文化が必要になったということも含めて、タイ族が自らの文化について積極的に再考し表現できる社会的状況が作られていったのである。

このような時代の流れを踏まえた上で、本稿では、シブソンパンナーが中国の一部となって以降のタイ語新聞の刊行とそれをめぐる状況を取り上げ、そこに現れるタイ族文化の発展・再編の一面について議論したい。

筆者は以前、シブソンパンナーの辺境に位置するムンロンで在地の「タイ族知識人」によっておこなわれた、ムンロンの歴史に関するビデオ CD

作成について分析した【イサラー2006】。それは、伝統的価値観や政府の公式見解にしばられず、生活者の視点で文化創造ができる新たなタイプの「タイ族知識人」が自ら発案して実行したものであった。ビデオ CD という媒体を用いようとする発想自体、「伝統的」タイプの知識人³⁾や中国の高等教育を受けて指導的な公務員として働く人からは出てこないと考えられる。

シブソンパンナーの社会では、出家経験によってタイ族の伝統的な文字を学習しており、文字で伝統的文化を伝承することができることが「伝統的」タイプの知識人の重要な条件であった。しかしながら、前述のように、伝統的タイ文字は文化大革命で衰退した。その後、仏教の復興により伝統的タイ文字も復活した。この文化復興運動においては伝統的タイ文字の知識をもつ人々が重要な役割を果たした。彼らは「伝統的」タイプの知識人と異なり、村落など自らの生活世界を超えた外部との結びつきを深めていた。前述のビデオ CD を作った「タイ族知識人」はこうした中から生まれたものである。新たな「タイ族知識人」には、更に仏教復興後の僧侶や、政府機関で働く者たちも存在した。彼らは、村落社会の枠を超えて、村落と政府や外部の機関とを結ぶ役割を果たしていた。

本稿で取り上げる新聞社のスタッフもそうした新たな「タイ族知識人」である。新聞社は、シブソンパンナーの中心地である州都景洪（チェンフン）にある公的機関で、そこで働くスタッフの多くは中国式高等教育も受けている公務員であり、当然その活動は、中国共産党や政府側の意図の枠内でおこなわれる。しかし、タイ語新聞編集にあたるスタッフはすべてタイ族であり【西双版纳傣

族自治州地方志編纂委員会編 2002b : 281]、その活動の中には、政府の公式見解にしばられないタイ族自身による文化活動の側面がみられたのではないと思われる。

本文中で述べるように、タイ語新聞は、1950年代に、共産党政府のプロパガンダの役割を果たすものとしてのみ刊行された。しかしながら、文化大革命を経て、1980年代を中心として起こった文化復興の中で、タイ語新聞は、タイ族文化に関する内容を豊かにしていった。この際、読者の投稿もなされていった。文化復興後の状況の中で、タイ語新聞は、政府の政策を地方へ普及させるものという性格を維持すると同時に、民衆の関心を引き付けるものとして機能していったのである。タイ語新聞の刊行に携わったスタッフは、一方的に、政府の見解を普及させることのみに関わったわけではないのではないと思われる。

このような問題意識を念頭に、以下、新聞社のタイ語新聞部門の活動が、タイ族文化の発展・再編においてどのように位置づけられるかを考察してみたい。

議論をするにあたって使用する資料・情報は以下の通りである。近年のタイ語新聞に関わる動向については、1992年以降の、筆者の新聞社をめぐる状況の観察と、新聞社のタイ族スタッフに対するインタビューで得た情報を使う。その中で、2000年8月にタイ語新聞の編集者からの聞き取りによって得られた情報が特に重要になる⁴⁾。また、新聞社の歴史・活動などについては、『西双版纳五十年 1950—2000. 2』[中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000]⁵⁾、『西双版纳傣族自治州志』[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002a, b]⁶⁾を中心として用いる⁷⁾。

2. シブソンパンナーにおける新聞と西双版纳報社

(1)タイ語新聞の発刊と西双版纳報社の成立

1953年1月1日に西双版纳傣族自治区が正式に成立したあと、同年8月に「西双版纳傣族自治区各族各界代表会議」はタイ文字を「改革」する決定をし、自治区の「傣族文字改進黨委員会」が成立した。その後、中国科学院の専門家の援助・指導の下で「傣文(タイ文字)改進黨案」が起草され、中央人民政府により試行が批准された[中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000:45]。これが、シブソンパンナーにおいて新タイ文字(5参照)がつくられるきっかけであった。この基礎の上に、タイ語の新聞を出版する準備がなされ、またタイ文字印刷所が成立したという⁸⁾[中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000:45]。

1954年8月25日には、不定期ではあるが、タイ文字を用いた謄写版刷小新聞の刊行が、中国共産党西双版纳傣族自治州边疆工作委員会⁹⁾により始まった。この新聞は毎回400部発行された。その内容は、「边境民族地区」が実際に選んで用いた、中央人民廣播電台(放送局)および雲南人民廣播電台(放送局)のニュースであったという。これは、『西双版纳五十年』の中では、タイ族人民に向けてのタイムリーな宣伝教育であると位置づけられている¹⁰⁾[中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000:45]。

1956年、中国共産党雲南省委員会はシブソンパンナーで新聞を創刊することを決定した[中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000:86, 西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:276, 277]。中国共産党思茅地方委員会と西双版纳傣族自治州边疆工作委員会はそれを受けて新聞発刊の計画を

進めた。州边疆工作委員会は新聞の性質と報道の方針を決定し、刊行計画報告書を作成した[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002:277]。ここでは、新聞は州边疆工作委員会の機関報であり[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:277; 中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000:86]、党と全州の各民族の人々の代弁者であり、地元の報道は農村を主とし農民を主たる対象とするとされた。また、新聞は党の総路線を宣伝し、党の各項の方針・政策を宣伝し—特に民族政策を宣伝・貫徹し—、国内外の情勢を伝え、科学知識を伝え、各民族の人々の愛国主義と社会主義の自覚を高め、党の各項の仕事を推進しなければならないと規定された[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:277]。

その年の秋、州边疆工作委員会は、新聞社と印刷所の計画・建設を始めさせた。州边疆工作委員会は、学校教師と機関幹部の中から 10 名あまりを選び出して編集者・記者とした。また、土地改革工作隊の中から 10 名あまりのタイ族青年を精選して、雲南人民印刷所に行かせて印刷技術を学ばせた¹¹⁾ [西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:277-278; 中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000:86]。

1957 年 3 月 4 日に「カーオ・サーン Khaaw Saan」(ニュースという意味、中国語では『消息報』)という名前のタイ語版の新聞が創刊された¹²⁾ [2000 年 8 月の編集者からの聞き取り、西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:278; 中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000:86]。1959 年 10 月、タイ語新聞は「ナンスーピム・シブソンパンナー Nangsuuphim Sipsongpanna」(シブソンパンナー新聞という意味、中国語では『西版纳

報』)と改名され[中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000:86, 西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:276,278]、中国共産党西双版纳傣族自治州党委員会の機関報となった[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:276]。

このような経緯から以下のことが指摘できる。まず、新聞発刊に向け動いたのは、中国共産党の組織であるということである。具体的には中国共産党の雲南省委員会、あるいは西双版纳傣族自治州に関わる中国共産党の下部組織、西双版纳傣族自治州边疆工作委員会の名前が現れている¹³⁾。また、この新聞は州边疆工作委員会の機関報という位置づけであった。これらのことから、シブソンパンナーにおける新聞の発行自体、もともとは中華人民共和国の一部となったばかりのシブソンパンナーのタイ族に対する、中央からのプロパガンダ・宣伝を意図したものであったことがわかる。

よって、当然のことながら新聞は、タイ族に向けてタイ語で発行されなければならなかった。そもそも 1953 年から計画されたタイ文字の「改革」、すなわち新タイ文字の創始も、新聞発行が大きな目的のひとつであったことが『西双版纳五十年』の記事から予測できる。特に新聞に活字を使うとなると、上下に母音・声調記号などを付さねばならない伝統的なタイ文字(5 参照)は技術上の問題を引き起こす。それに対して、新タイ文字は横一列に活字を並べればよいシステムとなっており、活字印刷上、非常にメリットがあったのである。

タイ語新聞刊行が目的であったため、新聞社の初期の実働スタッフは、編集者・記者・印刷所の労働者とも全員がタイ族であった。彼らは、教師・機関の幹部・土地改革工作隊メンバーといった、中国の政策に賛同し、あるいは少なくとも反抗は

しなかった、そしておそらく中国語の知識もあつた人々であると思われる。しかし、タイ族によるタイ語新聞発刊の体制が敷かれたことは、注目すべきことと言えよう。これは、後述する新聞社のタイ語新聞スタッフのあり方(3参照)につながっていくものである。

また、タイ語版新聞の名称として使われた「カーオ・サーン」も「ナンスーピム」も、もともとシプソンパンナーのタイ語にはない言葉であり、タイ国語から導入したものである¹⁴⁾。このことから、新聞発刊時にはシプソンパンナーのタイ族社会においては「新聞」という概念自体が外来のものであったことがわかる。そこで導入されたのが、中国語の「消息」や「報」の音のタイ語化ではなく、同じ南西タイ語の系統であるタイ国語の言葉であったというのは興味深い。中国のもとでプロパガンダ・宣伝紙をつくりながらも、タイ族編集者たちは、他の地域のタイ族とのつながりをも意識していたのである。

(2) タイ語新聞と中国語新聞

中国語新聞発刊はタイ語新聞よりも遅かった。『消息報』の中国語版の試版が毎週一回発行されはじめたのは、1957年8月31日のことである。タイ語新聞も中国語新聞も、最初は週一回であったが[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:278,283,285]、タイ語新聞は B3 が 4 ページであったのに対し、中国語新聞は B4 が 2 ページであった[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:283,285]。1958年1月1日からはタイ語新聞も中国語新聞も五日に一度だされるようになり、同年2月には三日に一度となった[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編

2002b:283,284;中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000:86]。しかし、1958年に『消息報』の中国語版は停刊となった¹⁵⁾。一方、タイ語新聞は発行され続け、先にも見たように1959年10月には「ナンスーピム・シプソンパンナー」と改名された。

1960年になると、中国語新聞の再発行の動きが現れる¹⁶⁾。それは初めは、タイ語新聞である『ナンスーピム・シプソンパンナー』を翻訳したものであるとしてであった。そして1960年4月2日、中国語新聞は、『ナンスーピム・シプソンパンナー』の中国語訳語である『西双版纳報』として復刊・発行された[中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000:86-87]。この時は以前と同じく B4 が 2 ページであったが、1962年3月1日にタイ語新聞と同じ B3 が 4 ページになった。

文化大革命中の1966年8月1日にはタイ語新聞・中国語新聞の両方が停刊になった。1972年7月1日にはタイ語新聞が週一回、B4版で復刊された。1973年2月3日には週二回で B3 が 4 ページになった。この時中国語新聞も復刊され、タイ語新聞と同じ B3 が 4 ページであった。1974年1月1日には中国語新聞も週二回のペースとなった[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:283,285]¹⁷⁾。

ここまでの状況を見ると、刊行時期の早さ、停刊時期の短さ、紙面の大きさと枚数の多さなどを比較すると、タイ語新聞の方が中国語新聞より相対的に重視されていることがわかる。

だが内容面では、タイ語新聞と中国語新聞は同じ新聞を二つの言葉で刊行しているものと、とらえられていた。そして、1979年12月および1980年2月の段階で、タイ語新聞と中国語新聞を別々

の新聞とする方針が出され、それを踏まえて 1990 年 7 月終わり以降、タイ語新聞と中国語新聞とは二種類の別々の新聞という位置づけになった[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:279,283]。

さらに言えば、1990 年 7 月までは、タイ語新聞は中国語新聞からの翻訳版と位置づけられていたという[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:279,283]。それ以降においても、タイ語新聞の編集者によると、実質は中国語新聞の記事をタイ語に翻訳してタイ語新聞に載せる例が多いとのことであった[2000 年 8 月の編集者からの聞き取り]。

また、枚数や刊行頻度でも、中国語新聞の方がより勝る状況になった。1993 年 11 月には中国語新聞は週三回のペースとなり、土曜日には 8 ページにページ数が増やされた。それに対してタイ語新聞のほうは、変わらず週二回で 4 ページであったのである[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:283,285]。発行部数においても、1958 年から 1993 年の中で判明している数字だけを見ると、1973 年時点でタイ語新聞が中国語新聞を 400 部あまり上回った以外は、中国語新聞のほうが圧倒的に多い¹⁸⁾。

これらのことから、新聞社の活動は、自治区・自治州成立間もないころはタイ語新聞中心であったのが、のちに中国語新聞がより中心にすえられるようになったと言えよう。これは、漢族移民の増加[長谷川 2000; Evans 2001]などに伴うものであると推測できる。

それでも、タイ文字で書かれたものと言えば手書きの写本や貝葉という「解放」前の状況に対して、シブソンパンナーにおけるタイ文字の使い方

に「活字印刷」という新たな側面を加えるのに、タイ文字による新聞の日常的刊行が大きな役割を果たしたことは否定できない。

3. タイ語新聞のスタッフ・記事の出所・購読者・紙面構成

(1) タイ語新聞のスタッフ

前述のように、1990 年終わりには、同じ新聞をタイ語と中国語の二言語で刊行するという位置づけから、二種類の別々の新聞という位置づけに変わり、タイ語新聞編集室と中国語新聞編集室とが正式に分けられた[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:279,283]。現在、タイ語新聞に関わる正規の職員としては、編集者一人、記者四人、文字の打ち込みや紙面レイアウトなど技術面のスタッフが三人いる¹⁹⁾。すべて現地のタイ族である。編集者と四人の記者は男性であり、文字入力・紙面レイアウトをするスタッフは女性である²⁰⁾。

現在の編集者は、雲南省省都の昆明にある少数民族幹部養成大学、雲南民族学院を卒業している²¹⁾。彼は実質上、タイ語新聞のスタッフの長と認識されている²²⁾。後述するように、彼は記事の採用・編集・紙面構成などに関してかなり大きな決定権を持っている。だが、筆者の観察では、編集長と記者たちの間の人間関係はとてもよいようである。編集長の家ではしばしばインフォーマルな食事会が開かれて記者たちが呼ばれる。彼らは酒を飲みながら談笑して、私的にもよい関係を深めているように見うけられた²³⁾。

(2) タイ語新聞の記事の出所

タイ語新聞に掲載される記事の出所は、大きく

二つに分けられる。

一つは、先にも触れたように、中国語新聞からの翻訳である。これらの記事の内容は、主に公的な規則や法律、公的な会議などに関してである。

もう一つは、記者たちによって直接取材され書かれた記事である。書かれた記事は編集者によって編集される。編集者によれば、時にはさらに上位の機関によって記事がチェックされねばならないこともあるという。ただ、上位機関によるチェックはそれほど厳しくはないとのことである。(2000年8月編集者からの聞き取り)。

記事の採用と編集に関する実質上の決定権を持つのは、編集者である。また、どのような種類の記事を載せるかなどについても、彼にはかなり強い権限がある。例えば、「外国のニュース」と「短いニュース」というコラムを創設したのは彼である。彼は、新聞をより面白くするために、これらのコラムを付け加えたのだという(2000年8月編集者からの聞き取り)。

中国の他の少数民族地域で作られた新聞と同様に、シブソンパンナーの新聞社が刊行した新聞は、北京へも年二回送られる²⁴⁾。シブソンパンナー内のニュースとはいえ、それが中央に送られるとわかっていれば、中国の中央の政策・方針にのっとり、また中国内の一少数民族自治州としての立場にたって記事を書いているということが示されねばならないだろう²⁵⁾。編集者はその側面にも考慮しているようである。

(3) タイ語新聞の購読者

西双版纳報社の刊行する新聞は、中国語新聞もタイ語新聞も一般の書店や街頭で売られることはない。すべて予約購読である。一部の販売価格は

1.5 角、一年の購読料は 16 元(2000 年 8 月編集者からの聞き取り)でかなり安価である。2000 年 8 月の時点ではタイ語新聞は五千部刊行され、シブソンパンナー各地の購読予約者に配達されている。購読申し込みは機関でなされることもあれば、個人でなされることもある(2000 年 8 月編集者からの聞き取り)。

前述のように、発刊前に決められた方針の中では、「地元の報道は農村を主とし農民を主たる対象とする」としていた[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002:277]。『西双版纳傣族自治州志』によると、圧倒的多数の読者は農村居住者であるという[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:284]。

新文字は、その創生期より、学校教育や地域への教師派遣など様々な方法で民衆への普及が試みられた。しかしながら文化大革命中に新文字教育が中止された。従って、1960 年代以前に教育を受けた世代(現在およそ 50 歳以上)はほとんどが新文字を読むことができる。新文字教育は、1980 年代に復活したが、現在、若い世代はタイ語新聞に全く関心のない者も多い。新たに復活した新文字教育は、実際のところあまりいきとどいていなかった。新文字教育は週に 1 時間のみで、また全ての学校で教えられたわけではなかった。新文字で書かれた読み物を読む能力は育成されていなかったのである。また、現在、彼らはテレビから情報が得られるので、新聞を必要としない。従ってタイ語新聞を読むのは、50 歳以上の農民ということになる。

また、編集者によれば、新聞の購読者は、チェンロンとムンハーイの者が多いという。この理由としては、まず、この二つのムンが、シブソンパ

ンナーで最も人口が多いという点があげられる。また、シブソンパンナーの社会・経済の中心であるこの二つのムンは、日常生活において、漢族の近代的生活の影響が強い。従って、この二つのムンにおいては、新聞による情報が必要とされると考えられる。

(4) タイ語新聞の紙面構成

1978年12月の中国共産党第十一届中央委員会第三次全体会議以降、圧倒的多数の読者は農村居住者であることを踏まえて、それまで中国語新聞と外からのニュースの翻訳に全面的に依拠していたタイ語新聞の作り方を変え、地元ニュースの分量を増やし取材によるニュース、地元のニュースを主とするようになった。それにしたがって紙面は、第一面が主に西双版纳州と国内外の重大ニュース、第二面が経済面、第三面が時事ニュース、第四面が文芸・学芸面でタイ族の文学作品を載せるということになった[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:284]。

編集者へのインタビューによれば、第一面と第二面には、公的な会議、中央や省レベルの上位機関の幹部の自治州への訪問、自治州の地元の農業発展などの記事が載せられる。第三面は、ヘルスケアや学校教育など社会に関する記事の掲載にあてられる。また、前述した「短いニュース」などのコラムもここに載せられる(2000年8月編集者からの聞き取り)。

それに対して第四面は、『西双版纳傣族自治州志』において、以下のように説明されている。

「『西双版纳報』のタイ語新聞は、文芸・学芸面を通して、「貝葉」・「緑の宝石」・「孔雀の故郷」

などの深い歓迎を受ける記事コーナーをもって、詩歌・散文・民間故事を載せ、歴史上の有名人・おもしろいニュース・風土人情を紹介し、小説を掲載し、民族文化を発揚し、文化生活を豊富にし、社会主義文化の障壁を繁栄させ、精神文明建設を促進し、各民族の文学の新しく出てきた優れた人物を育て、西双版纳の知名度を拡大する。」

編集者によれば、第四面にはカム・カップ Kham Khap と呼ばれる様式の詩・歌(4参照)、ニヤーイ Ni-yaay と呼ばれる小説、カム・ソン Kham Son と呼ばれる仏教の教え、カム・フン・ローク Kham Hun Lok と呼ばれることわざなど、タイ族の伝統的文化様式に沿った記事が載せられている。ここには、読者から投稿されたカム・カップも掲載される(2000年8月編集者からの聞き取り)。筆者も実際の新新聞を見て、それらを確認した²⁶⁾。

第一面から第三面までは、政府から人々への、いわば一方通行のニュースの伝達に使われているのに対し、第四面は読者も参加する場であると言える。そして、『西双版纳傣族自治州志』にあるように、「民族文化を発揚し、文化生活を豊富にする」作用もあるものと考えられる。

4. タイ語新聞の文化面におけるカム・カップ

以上見てきたように、タイ語新聞は第一義的には共産党・政府側からタイ族の人々へニュースを伝えるという目的を持つものであるが、にもかかわらず、文化面である第四面の存在は、タイ族自身によるタイ族文化の発展・再編という役割を担っている可能性がある。よって、筆者は、タイ語新聞第四面のあり方を検討することによって、この問題について考えてみたい。

第四面の中で最も人気があるのは、カム・カップであるという(2000年8月編集者からの聞き取り)。よって、以下、カム・カップに焦点を絞って議論していきたい。

まずカム・カップとはどのようなものであり、「解放」後にどのように扱われてきたかを述べ、それを踏まえてタイ語新聞に掲載されたカム・カップについて考えたい。

(1) カム・カップの「伝統的」あり方

カム・カップのカム Kham は言葉という意味であり、カップ Khap は歌あるいは歌うという意味である。伝統的なタイ族社会において、カップは、各種の儀礼・祭りの場で歌われることもあり、そこで活躍するのはチャーン・カップ Chaang Khap と呼ばれる歌の専門家であった²⁷⁾。カム・カップには「詩」という意味もあり、歌われずに文字で書かれるだけのものもある。カム・カップを書くのは、文字の書けるタイ族の知識人であるが、知識人であるからと言ってすべての人がカム・カップを作れるわけではない。

「解放」前は、ムン(国)の儀礼・祭りの場でもカップが歌われた。ムンの政治権力は、儀礼・祭りで必要な場合チャーン・カップを調達した。宮廷で、各ムンから集まったチャーン・カップによる歌比べがおこなわれることもあった。ムン・チェンフンや王と関係の深いムンハム、ムン・チェンハーのチャーン・カップは、ムンの儀礼の際に王をたたえるカップも歌ったという【馬場 1990 : 160 - 162; Baba 2007; Davis 1998】。

(2) カム・カップの新しい形態・内容

「解放」後は、チャーン・カップの中には、中

国政府側のイデオロギーをカム・カップにして歌い、プロパガンダの「道具」となったものもあるという。しかしながら、文化大革命後にさまざまなマス・メディアが発達してくると、直接に儀礼・祭りの場でチャーン・カップが歌うのを聞く以外に、マス・メディアを通して、人々はカップに触れることができるようになった。まず、ラジオやテレビといったメディアを通してカップが流されることが多い。また、カセット・テープやビデオCDも広く流通しており、その中にはチャーン・カップの歌ったカップを録画・録音したものが幾種類もある²⁸⁾。このように、カップを「聞く」他に「見る」という方法が表れたのであるが、更にタイ語新聞において新文字によってカップが印刷されることで、カップを「読む」という手段があらわれたのである。新聞に掲載されたカップは書かれたものではあるが、人々はそれをあたかも歌をうたうように、メロディーをつけて読むことが多い。従って、新聞のカップを読む人々は、カップを「聞く」と「読む」ことにそれほどの違いを感じていないと思われ、このことが、新聞に掲載されたカップを受け入れやすくしていったのではないかと推測される。カップを文字で表わし歌のように読むことは、「伝統的」知識人によって行われてきたものであるが、新聞において新文字で記されることによって、より多くの人々に、カップを「読む」ことが普及していった。

こうしたカップの内容は党や政府の政策・方針や中国側からみて賞賛すべき姿などを歌ったものもあるが、一方で伝統的な内容を持つものもある。この点を踏まえて、次にタイ語新聞におけるカップについて述べることにしたい。

(3) タイ語新聞におけるカム・カップ

1) 発刊当初のカム・カップ

『西双版纳傣族自治州志』は、タイ語新聞のカム・カップについて以下のように説明している。

「『西双版纳報』のタイ語新聞は党の新聞刊行の方針を堅持し、人民のために服務するという目的を堅持し、党の方針・制作を宣伝するよう努力し、各時期の活動の中心をしっかりとめぐって、タイ族人民が喜んで見聞きするような各種方式を用いて群衆に対して宣伝し、中国語新聞では代替できない作用を發揮する。「チャーン・カップ」はタイ族の歌手であり、チャーン・カップの歌は最も人を引きつける。チャーン・カップの歌詞(=カム・カップ)は、幹部、民衆が最も喜ぶ材料である。新聞を発刊した初期は、編集者は全州の民族の特徴に依拠し、民族形式を運用し、党の方針・政策をチャーン・カップの歌詞にして第一面のトップ記事として載せた。タイ族民衆は新聞を読むこととチャーン・カップの歌を通して、党の方針・政策と中心的活動について理解した。…」[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員會編 2002b:284]

これによると、発刊当時は、党の方針・政策を伝えることを目的に作られたカム・カップが第一面のトップ記事となっていたことがわかる。また、当時から第四面の文化面にもカム・カップが載せられていたという[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員會編 2002b:284]。

2) 第四面のカム・カップの内容

タイ語新聞に掲載されるカム・カップは、1973年から増加した。編集者によれば、村人たちが新聞を読むのは、他のニュースよりカム・カップを読みたいからだという。また、第四面の記事は新

聞社のスタッフによって書かれるだけでなく、読者が自分のつくったカム・カップを投稿することもできる²⁹⁾。採用されると少額であるが原稿料が出る³⁰⁾(2000年8月編集者からの聞き取り)。

ここで、タイ語新聞1999年9月1日から12月18日までの第四面に掲載されたカム・カップのタイトルを挙げてみよう。投稿だということが確実に分かるものには、そのように付記した。

- ・「タオ村は豚をたくさん飼ってから金持ちになった」(9月1日)
- ・「支配者にカティ・ターオ・ターンハー(支配者の心得)を教える言葉」(9月4日、投稿)
- ・「忍耐力のある教師」(9月8日)
- ・「カム・セン(人名)が子供たちに教える言葉」(9月11日、投稿)
- ・「若い夫婦に教える言葉」(9月15日、投稿)
- ・「チャーン・カップの会議の話」(9月18日)
- ・「イー・ゲンカム(人名)は金持ちになったら貧しい人を援助する」(9月22日、投稿)
- ・「シブソンパンナーは大発展して今は豊かになった」(9月25日)
- ・「中華人民共和国五十周年」(9月29日)
- ・「中華人民共和国五十周年」(10月2日)
- ・「老人を賞賛する言葉」(10月6日)
- ・「ナンヤーブ(まじないによって武器が入らなくなった皮膚)を信じないように」(10月9日、投稿)
- ・「家の周りをきれいにしよう」(10月13日)
- ・「女性と男性の掛け合いの言葉」(10月16日、投稿)
- ・「イー・ゴンカム(人名)について」(10月20日、投稿)
- ・「ミッショナリーの医者ガルー(シブソンパンナ

一のタイ族)の医者に負けた」(10月23日・27日、投稿)

- ・「公糧は今年は去年を上回った」(11月3日)
- ・「年中行事」(11月6日・10日・13日)
- ・「タイ語新聞は内容が面白い」(11月17日)
- ・「マカオが中国にもどって国民は喜んだ」(11月20日・24日・27日)
- ・「偽医者にだまされぬよう気をつけなさい」(12月4日)
- ・「勤勉な人を褒める言葉」(12月11日)
- ・「市場でものを盗まれた話」(12月15日)
- ・「もし勤勉に茶を植えれば金持ちになる」(12月18日)

この24のカム・カップのうち、読者からの投稿であることが確実なもの³¹⁾は8つある。そのうち三つは、「教える言葉(カム・ソン Kham Son)」をタイトルとしている。また、女性と男性の掛け合いもある。これらはカム・カップの伝統的形のものである。他にはイー・ゲンカムという実在の女性を賞賛するものが二つ、西洋医学に対してタイ族伝統医学を賞賛するものがひとつ、迷信を信じないようにという内容のものがひとつである。以下に、1999年10月20日の新聞に掲載されたカム・カップの内容の例を挙げる。

イー・コンカム(「婦女主任」)の話(作者:イー・ナンウーイホイ)

「…今回、イー・コンカムという「婦女主任」について話す。コンロン村出身のイー・コンカムは村人から「婦女主任」という地位に選ばれた。彼女は一生懸命村人に「家族計画」を教えていた。これからは子供を沢山産むのはやめたほうがいい。また、早めに結婚した女性は二十歳にならないと

出産できない、一家族あたりでは二人までの子供しか産めないという法律がある。二人目の子供は、母親が24歳になっていないと産むことは禁止だ。出産できる年齢になっていないのに結婚してしまうと、罰金を課せられるという法律もある。

イー・コンカムはこの法律を大事にして、「郷」の中の各村で村人に一生懸命教えていた。村人も彼女が言うことにしたがって、きちんと法律を守っているのだ。人々は彼女を褒めている。「政府」も彼女を高く評価している。…」

一方、記者・編集者側が作ったものは、お手本となるような村や人々の姿や経済発展を称えるもの、生活における注意や勧めを呼びかけるもの、公的会議や中華人民共和国レベルの大きな動き・記念日などに関するものである。こちらには、伝統的な内容と言えるものは入っていない。

このように、同じカム・カップと言っても、読者の投稿したものと記者・編集者側の作ったものは、その傾向が異なる。だが、読者が投稿できるという意味では、タイ語新聞第四面は、党や政府の宣伝の場という性格を越えて、タイ族の文化表現のための場を提供していると言えるのである。

5. 新文字と古文字のせめぎあい

タイ語新聞印刷に使われた文字は、2(1)でも述べたように、当初は新タイ文字であった。それが1992年に「伝統的」様式のタイ文字を使おうという決定がなされ、それがまた新タイ文字にもどされている。この章では、その経緯とそこから読み取れるタイ語新聞の性格について考察したい。

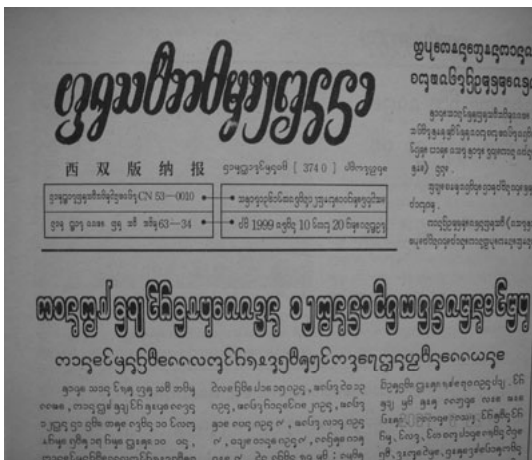
(1) 古文字と新文字

現在、西双版纳傣族自治州では、タイ族が伝統

的に使ってきたタイ文字を中国語で「老傣文」、タイ語でトー・タイ・カオ Too Tai Kaw と呼んでいる。どちらも「古いタイ文字」という意味である。それに対して、「解放」後に「古いタイ文字」をもとにつくられた文字は、中国語で「新傣文」、タイ語でトー・タイ・マイ Too Tai Mai と呼ばれる。どちらも「新しいタイ文字」という意味である。本稿では、それを踏まえ、タイ族が伝統的に使ってきたタイ文字を「古文字」、新たにつくられた文字を「新文字」と呼び、以下、説明・議論をしていきたい（写真 1,2 参照）。



写真 1 (上) 古文字新聞 写真 2 (下) 新文字新聞



古文字は、タム Tham 文字と呼ばれることもある。それは、仏教経典（タム）を書く文字として使わ

れてきたからである。この文字は、シブソンパンナーだけではなく、ミャンマーのシャン州やタイ国北部・ラオスの、仏教を受け入れているタイ系民族により広く使われている。文字の形に少し差があるが、別の地域のものであっても相互に読むことが可能である。タイ族は上座仏教を信仰しており、男性は普通、少年・青年時の数年から十数年ほどにわたる出家生活の中でタイ文字を学んだ。これは、シブソンパンナーでも、その南のミャンマーのシャン州東部やタイ国北部・ラオス北部のタイ族³²⁾でも共通する文化的特徴であった。

タイ族の「伝統的」な知識人たちは、このタイ文字で本³³⁾を書いたり書き写したりし、彼らの文化を発展・継承してきた。また、中国におけるタイ文字の教育は、少数民族幹部養成大学である雲南民族学院でもなされてきており、そこで学んだタイ族エリートたちの中にも、タイ文字を自由に扱うことができる者が多い。

それに対して新文字は、2 でも述べたが、1953 年 8 月に「西双版纳傣族自治区各族各界代表会議」でなされた決定にしたがって「傣族文字改進委員会」が組織され、中国科学院の専門家の援助・指導の下での「傣文（タイ文字）改進法案」起草、中央人民政府による試行の批准[[中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000:45]という過程を経て³⁴⁾、1956 年に完成したものであった。つまり、自治州（1953 年時は自治区）で提案され中央人民政府の批准を受けてつくられた、中国少数民族文字のひとつなのである。

だが、新文字の形成には、タイ族の知識人たちも深く関わっていた。中央から派遣された言語学者のフー・マオ・チー³⁵⁾の他は、チェンフンの王族である刀世勳、刀金祥、刀新華³⁶⁾といったメン

バーが新文字作成にあたった。刀世勳はシブソンパンナーの最後の「王」であり、南京に長く留学していた人物である³⁷⁾。刀金祥は新聞社に記者として勤め、後にタイ族文化に関する著作も出版する知識人である。当時青年であった彼らは、王族であったがゆえに、タイ文字（古文字）はもちろんのこと中国語の教育も受けていた。そして彼らは王族青年の中でも、シブソンパンナーが中華人民共和国の一部とされたこと、タイ族が中国の少数民族とされたことを、受け入れた側の人々であったといえよう。新文字の作成には、中国の少数民族としてのタイ族文化の発展を考える王族知識人たちも関わっていたのである。

(2) 古文字の弾圧・復活・発展

新文字が作られた後、出版物や新聞、教科書など活字印刷されるものに使われたのは新文字であった。町にある政府の機関には看板がかけられていたが、その機関名の中国語の横に併記されたタイ文字も新文字であった³⁸⁾。

一方、新文字が作られた後も、古文字はタイ族の人々の間で使いつづけられた。当時タイ族男性の多くは一時的にせよ出家し、その際に仏教寺院で古文字を学ぶので、タイ族男性の多くが古文字の読み書きができた。特に仏教の活動においては、古文字は欠くことのできないものであった。経典はすべて古文字であった。

シブソンパンナーにおいてタイ族の「伝統的」文字文化を上から規制する動きとして、最も大きな影響があったのは、1966年から1976年までの文化大革命である。その時代に、もともとのタイ文字、すなわち古文字で書かれた文書の多くは燃やされた。仏教が禁じられ、古文字を学ぶ場所

ある寺院がなくなり古文字を教える立場にある僧侶もいなくなった。文化大革命終了後、1970年代終わりになって、再び仏教の信仰が許されるようになる、寺院で古文字を学ぶ伝統も復活していた。

「はじめに」でも述べたように、1980年代後半からは対外開放が積極的に進められるようになった。対外開放の向く先としては、シブソンパンナーと文化的伝統を同じくする国境の南のタイ族地域も含まれる。そのタイ族文化の共通性が語られるようになると、共通の文字である古文字、すなわちタム文字の文化的意義も強く意識されることとなった。その流れを受けて、1986年には、西双版纳傣族自治州第六届人民代表大会第五次会議で古文字の使用を回復する決定がなされた[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:283]。新文字とともに、古文字が公共の場で使われるようになったのである。1980年代終わり以降は、シブソンパンナーの学校教育や職場の研修の中でもタム文字の教育が積極的になされた。1988年には古文字を使った最初の書物も出版された³⁹⁾。

1992年以降、観光開発が盛んにされるようになり、タイ族文化がシブソンパンナー観光の目玉とされるようになる[長谷川 2001: 112-119]と、古文字はさらに、タイ族文化の目に見える象徴として注目されるようになった。タイ族は「貝葉経」（古文字で書かれた手書き文書）の伝統を持つ高い文化と古い歴史を持った少数民族として宣伝されることになり、タイ族自らもそのことに誇りを持つようになったのである。

(3) タイ語新聞における新文字と古文字のせめぎあい

さて、以上のような流れの中で、タイ語新聞はどのような態度をとってきただろうか。

タイ語新聞は、1957年に発刊された時には新文字が使われた。2でも見たように、そもそも新文字が作られる目的のひとつに、それによる新聞の刊行があったのである〔中共西双版纳州委党史征集研究室編：45〕。文化大革命中に、古文字を使った民間の文書が燃やされ古文字を使うことができなくなった時期にも、新文字で出されるこの新聞は刊行されつづけた（2参照）。

だが、1980年代後半からの、シブソンパンナー社会の古文字復活の動きは、新聞社にも影響を与えた。1986年の西双版纳傣族自治州人民代表大会の決定のあと、タイ語新聞も古文字を使って出版するよとの要求がなされた〔西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:283〕。編集者へのインタビューによれば、新聞の印刷に古文字を使おうとしたのは、学校教育においても仏教寺院においても古文字が使用され、それが成功し安定していた状況であったため、新聞においても古文字による印刷を始めるべき時期と考えられたからだという（2000年8月編集者からの聞き取り）。

当時、古文字は活字にされていなかった。古文字を小さな鉛の活字にするのは容易ではなかった。古文字は横一列に並んだ文字の上下にも文字や母音・声調記号などがつけられるため（写真1参照）である。前述のタイ語新聞編集者は活字用の古文字のデザインをして、自ら北京に持っていった。それをもとに新華印刷廠で活字二組が作られ、新聞社に植字作業所が建てられた。また、新聞社の記者・植字技術者などに対する古文字の研修がおこなわれた。1992年1月23日には、古文字のタイ語新聞が出版された。最初の段階では、古文字

は新聞の第一面・第二面にのみ使われ、第三面と第四面は新文字のまま印刷された。翌年になって、四面すべてに古文字が使われるようになった〔西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b:283; 2000年8月編集者からの聞き取り〕⁴⁰⁾。

しかし、1995年には新聞の印刷に使われる文字は新文字にもどってしまった。その理由は、古文字が使われるようになってから、購読者数が激減したためであった。編集者によれば、新文字が使われていた時代には五千部以上の定期購読があった⁴¹⁾のが、古文字を使うようになって四二八部にまで減ってしまったという（2000年8月編集者からの聞き取り）。

古文字の新聞が受け入れられなかった主な理由は二つあると、編集者は言う。ひとつには、印刷技術の未熟さにより、古文字の活字が美しくなくて読みにくく、特に高齢の人々には読みづらかったからだという。二つめは、新文字は読めても古文字は読めない人がかなりいるという理由である（2000年8月編集者からの聞き取り）。そのような傾向は、文革のためにその少年・青年期に寺院で古文字の読み書きを習得することができなかった中年の人々に多い⁴²⁾。つまり、中・高年の両世代にとって、古文字の新聞は受け入れがたかったということなのである。

以上のように新聞社は、新文字でタイ語新聞を刊行するという道を選んだ。これは、1980年代後半以降の、シブソンパンナー社会の古文字賞賛の動きに逆行している。しかし、購読者数の減少はタイ語新聞存続自体を危うくする危機的な状況であった。新聞社は、新文字を選ばざるを得なかったのである⁴³⁾。

観光の目玉にもなり国境の南のタイ族との関わ

りて対外開放をも象徴する古文字は、タイ語新聞にはそぐわなかった。中国の少数民族となつて以来タイ族の人々の生活の場で使われてきた実績のある新文字が、新聞には使われねばならなかった。新聞は、華やかな「観光」や「対外開放」の風潮を離れて、タイ族の人々の生活文化を支える役割を地道に担う方向に進んだ。

6. コンピューター化と出版事業

(1) 新聞作成へのコンピューター技術の導入

新聞に使われる文字が新文字にもどった同じ1995年には、公的な資金のサポートのもと、新聞刊行にコンピューターを導入しようという動きが始まっている。編集者は、山東省のコンピューター会社に五ヶ月間の長期出張をし、技術者とともにタイ文字（新文字）のフォントの作成、文字入力システムなどの開発に携わった（2000年8月編集者からの聞き取り）。

そのあと、コンピューターなどの機器が導入された。新聞社の文字打ち込み・紙面のレイアウトに関わるタイ族スタッフに対しては、技術開発に携わった山東省のコンピューター会社から派遣された技術者によって研修がおこなわれた⁴⁴⁾（2000年8月編集者からの聞き取り）。コンピューターによる新聞が初めて出されたのは1997年のことであった。

コンピューター化にあたって採用されたタイ文字は、新文字の方であった。4でも述べたように、購読者数の減少で新聞社は古文字でなく新文字を使わざるを得ない状況にあったので、その意味では自然な選択とも言える。しかし一方で、中国国内の状況では、活字と同じく、横一列の文字

列だけですむ新文字のほうが上下に文字・記号のつく古文字よりもコンピューターに導入しやすかったのは確かである⁴⁵⁾。新文字はひとつのキーにひとつの文字が対応する、いわばローマ字入力と同じ方法で入力された。

(2) 出版事業の請負

新聞社へのコンピューターの導入は、新聞そのものだけでなくシブソンパンナーにおけるタイ語印刷・出版全体にも大きな影響を与えた。新聞社は、外部からのタイ語印刷・出版の依頼をも容易に受けられるようになったからである。

古文字に関しては、コンピューターを使ってタイ文字を印刷できる場合はシブソンパンナー内で他にも存在していた。それは、西双版纳傣族自治州の中心寺院として1989年に建てられたパーチャー寺⁴⁶⁾であった。パーチャー寺には、1994年にタム文字が打てるタイ国のコンピューターが導入され、幾人かの僧侶がそれを使う技術を身につけた1996年から実際にタイ文字の打ち込み・印刷の仕事ができるようになった（1999年パーチャー寺でのインタビューによる）。この時期は、新聞社でのコンピューターによるタイ語の印刷は新文字しかできない状態であった。よって、シブソンパンナーで古文字を使った印刷が必要な場合は、パーチャー寺に依頼がなされた。だが、そのタム文字は、チェントウンのタイ文字（タイ・クーン文字）であったので、微妙な形がシブソンパンナーの文字と異なっており、違和感を表明する者もあった。タイ語新聞の編集者も、同様の意見を持っていた（2000年8月編集者からの聞き取り）。

新聞社では古文字を使うことはできなかったが⁴⁷⁾、同じ文書にタイ文字（新文字）と中国語を

混ぜて打つことが可能であった。編集者によると、タイ文字ばかりの出版物だとその内容が問題のあるものではないかと疑いをもたれる可能性があるが、中国語を入れておくとそのような問題が起りにくいという(2000年8月編集者からの聞き取り)。これは、中国の少数民族として、シブソンパンナーのタイ族がどのように自らの文化活動を展開していけばいいか、という面に配慮したものであると言える。

新聞社のコンピューターを使って出版されたものには、タイ暦の小型日めくりカレンダーや、タイ語・中国語用語辞典、タイ族の伝統的占星術の本などが挙げられる⁴⁸⁾。タイ語新聞の編集者自身も、手書き文書を資料として集め、自ら編纂した暦や歴史書を出版している。カレンダーや辞典は、タイ族が日常生活の中で必要としているものである。また占星術の本も、儀礼などを行うのによい日を選ぶために欠かせない。つまり、新聞社は、主にタイ族の生活文化に関わる出版活動に従事してきたといえる。この点は、経典などの印刷が多いパーチャー寺のものとは異なっている。

以上のように、新聞社へのコンピューターの導入は、シブソンパンナーにおけるタイ語の書籍出版をより容易にした。また、タイ文字と中国語をひとつの文書の中に印刷するといった形態をとることも容易になった。それは、中国の少数民族としての、シブソンパンナーのタイ族の出版活動という性格を持つものであった。新聞社はここにおいて、タイ語新聞を通してだけでなく、より広い面でタイ族文化の発展に寄与することができるようになったのである。

7 おわりに

以上見てきたように、最初は政府のプロパガンダ、自治州の中国共産党機関の機関紙だったタイ語新聞は、タイ文字を媒介としたタイ族文化の発展・再編の場としても機能していくようになった。とくに注目されるのは、第四面において重視されたカム・カップである。新聞に掲載されたカム・カップは、政府のプロパガンダ的要素をもつ、記者・編集者側が作ったものの他に、伝統的な内容を含んだ読者投稿によるカム・カップも含まれている。読者が投稿可能なタイ語新聞第四面の存在は、タイ語新聞を、党や政府の宣伝の場という性格を越えた、タイ族が自ら文化を表現するための場とさせたのである。このことは、タイ語新聞刊行に携わる知識人が、政府と民衆をつなぐ位置にあってフレキシブルに動いていることを示唆するものである。

1980年代を中心とする文化復興の中で、古文字の復興も行われ、タイ語新聞も一時は、古文字による刊行がなされたが、印刷技術の未熟さによって読みづらく、また新中国となって以来、すでに新文字が生活に根付いたものとなっていることから、受け入れられず、最終的に、新文字による刊行に落ち着いた。

タイ語新聞は、タイ族の文化表現の場を提供したが、それは、タイ族の人々の日常生活に根ざした文化であり、思想や宗教の側面に関わる文化ではなかった。すなわち、1980年代後半以降におこった、対外開放に伴う国境の南のタイ族との交流や観光開発に伴うタイ族「伝統」文化の強調の動きとは、一線を画したものである。新中国によってつくられた新文字は、中国の少数民族としてのタイ族の文化を象徴するものである。そのような意味では、タイ語新聞に携わった知識人は、「中国」

という枠組みの中において、民族文化の表現を模索してきたといえる。

こうした動きは、筆者がすでに論じたムンロンの民間知識人の事例とも、本論でも言及したパーチャー寺を中心とする文化活動とも異なるものである。

筆者は今後、パーチャー寺の文化活動など、事例研究をさらに進める必要があると考えている。そして、さまざまな事例をつきあわせることによって、1980年代後半以降のシブソンパンナーにおけるタイ族文化発展・再編の様相の全体像を描きだし、さらに個々の事例がその全体像の中にどのように位置づけられるのかを提示することを最終的な目標としたい。

【注】

- 1) 「シブソンパンナー-Sipsongpanna」はタイ語であり、シブソンは12、パンナーは「千の田」という意味である。それは中国語では「西双版纳 xishuangbanna」と音訳され、自治州名にも使われている。本論文では、この地域を指すのに、タイ語原語の片仮名表記、つまり「シブソンパンナー」を利用する。
- 2) 「タイ族」は、東南アジア大陸部のタイ Thai 国、ラオス、ミャンマー（ビルマ）のシャン州、ベトナムの北部などの広い地域に居住しており、様々なサブグループがある。現在の中国雲南省西双版纳族自治州のタイ族（タイ・ルー）は、その中の一つのサブグループである。本稿における「タイ族」、「タイ語」、「タイ文字」という表現は、西双版纳族自治州に住んでいるタイ族とその言語・文字のことを意味している。
- 3) ここでいう「伝統的」タイプの知識人とは、比較的長期間の出家によって、タイ文字の読み書きはもちろん、さまざまな知識を身につけた人々のことを指す。
- 4) そこには編集者の個人的な見解も入っていることに注意しながら、議論を進めたい。
- 5) 『西双版纳五十年 1950—2000. 2』は、シブソンパンナーが中華人民共和国に組み入れられた50周年を記念して、中国共産党西双版纳族自治州委員会の党史征集研究室が編纂したものである。編年史として項目を年代順に並べる形で書かれており、ひとつひとつの事件・事象のおこった年月は正確に記されていると考えられる。ただし事件・事象に対する人々の対応や感情、およびその事件・事象の評価の部分は、編纂時点の中国共産党の立場から描かれた部分として、注意して取り扱わねばならない。

- 6) 『西双版纳傣族自治州志』は、上中下の三冊があり、その中で上冊の「卷六 中共西双版纳組織」と下冊の「卷四十 報刊通訊」を参照する。こちらも、具体的事件・事象については、その年月などが正確に記されていると考えてよい。だが、やはり政府の公的な立場から編集・出版したものであるため、執筆時点での公式見解の枠内での記述となっていることには留意すべきである。
- 7) 中国語で書かれた資料の読解については、加藤久美子氏の協力を得た。
- 8) また、タイ文字改進黨案は1955年に遂行されはじめたという[中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000: 45]。
- 9) 1953年の西双版纳傣族自治州成立と同時に、中国共産党西双版纳区边疆工作委员会が組織され、中国共産党思茅地方委員会(1953年3月に改称される前は寧洱地区委員会)に指導されることとなった[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002a: 407, 思茅地区地方志編纂委員会編 1996: 8]。1955年に西双版纳傣族自治州が西双版纳傣族自治州と改名されたあと、西双版纳区边疆工作委员会も西双版纳州边疆工作委员会となった[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002a: 407]。
- 10) 『西双版纳五十年』という書物は2000年に編纂されたものであり、これはその2000年の時点での位置づけである可能性もある。
- 11) タイ文字の活字は、北京新華字模廠で作られた[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b: 278]。
- 12) 創刊当時、新聞社には、記者・編集者13人、印刷所で働く者18人の計31人がいた[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b: 281]。
- 13) 新聞の発刊には、雲南省民族委員会、雲南省文化庁、思茅地方委員会の指示・配慮があったともされている[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b: 276]。
- 14) 1957年4月には、タイ国の「新聞代表団」がシブソンパンナーの新聞社を訪問している。タイ語新聞のタイ語名称決定には、その訪問が影響を与えている可能性がある[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b: 278]。
- 15) 「大躍進」とそれに伴う思想統制の動きの中で、文化的活動も規制を受けた。
- 16) 1960年になると「大躍進」に伴ってなされた各種の文化規制が弱まってきたという。タイ文字・タイ文化に関しても同様であった。1961年には学校で新タイ文字が教えられるようになった。また、そのころ、公務員として勤めていたタイ族知識人たちが、シブソンパンナーの歴史を編集して出版できる状況もあらわれた(2002年、西双版纳傣族自治州政治協商會議文史民族宗教連絡委員会の委員長(タイ族)へのインタビューによる)。
- 17) 1969年4月1日から28日までの間には、中国語新聞は6回のみ発行されている。
- 18) 以下、わかっている限りの発行部数を、年ごとに、タイ語新聞発行部数: 中国語新聞発行部数であらわす。
[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b: 290]
1958年 300:1100
1965年 1080:1500
1973年 3221:2810
1980年 1866:3802
1983年 1621:3461
1987年 2635:不明

- 1988年 902:不明
 1989年 3113:不明
 1990年 1579:10255
 1991年 544:10686
 1992年 1306:10535
 1993年 864:10006
 2000年8月の時点では、タイ語版新聞は五千部発行されていたという(2000年8月編集者からの聞き取り)。また、2007年の発行部数は、六千部を超えているという(2007年2月編集者からの聞き取り)。
- 19) コンピュータールームは、中国語新聞のスタッフと共同の部屋となっている。
- 20) 1993年終りの段階で、新聞社編集部には全部で42人のスタッフがおり、その中でタイ族が16人であった。また印刷所には全部で68人が働いており[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b: 281]、その中にもタイ族はいる。
- 21) 彼はチェンフン郊外の村で生まれ、1955年に少年僧として出家し1960年に還俗した。1964年には中学校に入り3年間の教育を受けた。文化大革命終了後、1977年に雲南民族学院に入学し卒業後にシブソンパンナーに帰ってきて、新聞社の編集者に任命された。
- 彼は、非常に美しいタイ文字の古文字(5参照)を書くことができ、北京で開かれた印刷用の少数民族文字デザインコンテストで一等賞を取ったこともある。
- 22) 彼は1993年12月に正式に西双版纳報社の「副総編」となっている。
- 23) 筆者もその食事会に誘われ、何度も参加した。
- 24) また、雲南民族学院へも送られている。
- 25) 一方、中国内の一少数民族自治州として、中央に対して自らを主張するという面もあるかもしれない。
- 26) 筆者は1999年9月1日から12月22日の約3ヶ月間のタイ語新聞を見ることができた。4(3)2で分析したのも、それらの新聞である。本来ならもっと長い期間にわたる新聞の分析が必要だが、外国人が新聞を購読したりバックナンバーを閲覧したりすることが難しいため、今回はそれをするができなかった。
- 27) チャーン・ピー Chaang Pii と呼ばれる笛の吹き手の笛の音に合わせて、決まった旋律にのせて歌われる。フレーズ歌うと、短い笛の独奏が入り、また同じ旋律にのせて次のフレーズを歌う。歌詞はほぼ決まっているものもあるが、その場合にも即興の部分をつけ加えることが多い。一方、ほとんど即興で歌われる歌もある。チャーン・カップには男性も女性もいて、男女一人ずつのチャーン・カップが交代で歌うこともある。歌の内容は、問いと答えというように、掛け合いになっている。
- カップが歌われる代表的な場としては、新築儀礼・結婚式・タイ暦の新年の行事・村の守護霊儀礼・村の少年僧出家儀式などがある。カップの内容は、それぞれの儀礼・祭事の内容に即したものになる。儀礼の場では、守護霊を呼び寄せるのにカップが歌われることもある。また、新築儀礼・結婚式などでは、客が夜通し宴会を続けるのに合わせて、一晚中歌うこともある。
- 28) 近年はビデオCDの再生機が一般家庭に広くいきわたっている。
- 29) 投稿できるようになったのは、1979年からである(2000年8月編集者からの聞き取りによる)。

- 30) 原稿料は、カム・カップの長さなどによって、四十元から百元の間である(2000年8月編集者からの聞き取りによる)。
- 31) その作者の名前などによって判断した。
- 32) その稿で言う「タイTai族」とは、タイTai語を話し、上座仏教を信じ、タム文字文化を持っていて、現在、中華人民共和国・ミャンマー・ラオス・タイの四つの国の国境を跨いで居住しているグループである。そのうち、中華人民共和国・ミャンマーにおいては、少数民族という扱いになる。
- 中華人民共和国の西双版纳自治州のタイ族は、中国語では「傣族」(ローマ字表記はdaizu)と呼ばれている。彼らは、同じ地域の他民族と自分たちとを区別したいときには自分たちを「タイTai」と呼んでいる。また一方で、彼らは「タイルーTai Lue」と呼ばれることもある。
- タイルーの「ルー」は元々、タイ語の方言の一つを示している。タイ族の分布する広い地域の中では、文字は同じだが、発音の違いなど方言差がある。この中の一つの方言系統を「ルー」というのである。ルーと呼ばれる人たちは、シブソンパンナーを中心として居住しているが、移住するなどして他の地域に住んでいる場合もある。例えばタイ国の北部、ラオスの北部、ビルマのシャン州にも「タイルー」は住んでいる。つまり、「タイルー」という呼び方で客観的に示されるのは、「シブソンパンナー」が中心または「シブソンパンナー」を故地とするタイ族のグループなのである。
- 33) シブソンパンナーの写本は、ポップと呼ばれる紙の折り綴じ本の形態をとっていることが多い。ポップには、サーという木(カジノキ)から作られた紙が使われる(ポップ・サー)。他に貝葉に書かれた写本もあるが、貝葉にタムを書くのには特殊な技術が必要とされる。また、最近では普通の紙に書かれることもある。
- 34) 傣文(タイ文字)改進黨案は1955年に遂行されはじめた[『西双版纳五十年』: 45]。
- ³⁵⁾ 漢字は不明である。
- 36) いずれも中国語名で、別にタイ語名をもっている。
- 37) なお刀世勳は、前代の「王」の甥であり、即位儀式をおこなった後も南京にもどって勉学をつづけた。支配者層の中には彼が王位につくのに反対するものも多かったとされる。反対者には告げられないまま彼は一時的にシブソンパンナーにもどり、反対者が異論を唱える間を与えないうちに即位式がおこなわれたという話もきくことができた。
- 38) 機関名は、タイ語で意味が通じるように訳されることは少なく、中国語音が外来語としてそのままタイ語に入っているものが多い。看板に書かれているのは、日本語にたとえて言えば、外来語の原語の横にカタカナ表記をしたもの、あるいは読み仮名を記したものであった。中国語の看板は縦書きにされるため、本来横書きされるべきタイ文字も漢字一字一字に対応する音ごとに切れ、縦に並べられた。
- 39) その内容は、タイ族の創世神話 Patamakap Phomsanglok であり、手書き文字で書かれたものであった[Dao Guo Zhung, Aai Un Pi ng]。
- 40) これは古文字を求める読者と新文字を求める読者両方を満足させるために取られた方策であるという[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b: 283]

41) 五千部という数字は、『西双版纳傣族自治州志』の記述と比較すると多すぎる。注 16 参照[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b : 290]。編集者はインタビューに答えた当時の発行部数を、かつて新文字で新聞を刊行していた時の部数と取り違えて答えたのかもしれない。

42) 『西双版纳傣族自治州志』では、大部分の青年・壮年が古文字を読めないため、購読者数が減ってしまったとのみ書かれている[西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002b : 283]

43) その後、それと連動する形で、タイ族の子どもたちに小学校で教えられるタイ文字も、古文字から新文字にもどっている。

44) 技術面のスタッフが三人のうち、文字入力全員が習得したが、紙面のレイアウト(中国語で排版と呼ばれる)は一人しかできない状態であるという。

45) もし新聞作成にコンピューターを導入する計画が古文字から新文字への転換の際にすでにあつたものとしたら、コンピューター化は新聞に使われる文字が新文字に戻ってしまった今一つの理由である可能性もある。

46) この寺に、雲南省仏教協会の西双版纳支部が置かれた。一方でこの寺には、タイ国など国境の南からもたらされた文化の影響が強い。この寺に納められている仏像はシブソンパンナー様式ではなく、タイ国からの輸入品である。またここにはタイ国に留学した僧侶たちが教える仏教学校が置かれている。生徒は若い僧侶たちだが、一般人向けのコースもあり、タイ国語・ビルマ語・英語

などの外国語も教えてられている。

ワット・パーチェーは、国境の南のタイ族との関係を重視し、タイ文化を発展させていこうとしていると位置づけることができる。その活動については、別稿で詳しく論じられねばならない。

47) 新聞社は、その後、古文字も導入しようとの計画が進めているが、まだ実現していない。古文字は、先にも述べたように上下に文字・記号がつく。文字入力の方法としては、子音字・母音字・記号を含めたものを一単位と見なし、中国語の漢字と同じ「五筆型」という文字の形の特徴から入力する方式が取られるよう、模索されている。もし、同様に上下に文字・記号のつく文字を打つことができるタイ国文字など、国境の南のタイ族地域ですでに取られていた方式を参考にしていたら、ひとつのキーにひとつの文字が対応する形での入力方法も可能であったと思われる。だが、それは参照されなかった。そういう意味でこの試みは、国境の南とつながる「タイ族」の文字ではなく、中国の少数民族としてのタイ族の文字として、古文字をコンピューターで使えるようにするものと位置づけることができる。

48) 例えば、1) ナンスー・パカトゥーン(暦、1998年に出版) 2) プンムン・シブソンパンナー(シブソンパンナーの歴史、2004年に出版) 3) ポップ・トーホート・タイ・テムカン(『漢傣字典』、玉康、岩罕、張秋生編著 2000年、雲南民族出版社) などがある。

【参考文献】

- 馬場雄司 1990 「雲南タイ・ルー族のツァーンハブ(賛哈)——歌(ハブ)を専門とする職能者の諸相」
藤井知昭・馬場雄司編『職能としての音楽』東京書籍
- Baba Yuji. 2007. Recent Changes in Tai-Lue Folksong (Khap Lue) in Northern Thailand and Yunnan, China. In Y. Terada (ed.), *Authenticity and Cultural Identity* (Senri Ethnological Reports 65). Osaka: National Museum of Ethnology. pp.91-105.
- Dao Guo Zhong, Aai Un Pi ng (ed.) 1988. *Pap Khamkhap Patamakap Phomsam Lok*. (タイ語) 雲南民族出版社
- Davis, S. 1998. Buddhist Song-Tales and Singers of Sipsongbanna, China (A Field Report). Paper Presented at the International Conference on Tai Studies, Mahidol University, Bangkok, 29-31 July.
- Evans, Grant. 2001. Transformation of Jinghong, Xishuangbanna, PRC. In G. Evans et al. (eds.), *Where China Meets Southeast Asia: Social&Cultural Change in the Border Regions*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies. pp.162-182.
- 長谷川清 2001 「観光開発と民族社会の変容—雲南省・西双版纳傣族自治州」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』世界思想社。

イサラー・ヤーナターン 2006 「タイ族在地知識人によるムンの「歴史」—シブソンパンナーのムンロン（勐龍）の事例」『年報 タイ研究』6。

景洪県地方志編纂委員会編 2000 『景洪県志』雲南人民出版社。

西双版纳傣族自治州地方志編纂委員会編 2002a. 「卷六 中共西双版纳組織」『西双版纳傣族自治州志』上冊 新華出版社。

——2002b. 「卷四十 報刊通訊」『西双版纳傣族自治州志』下冊 新華出版社。

《西双版纳自治州概況》編写組 1986. 『西双版纳傣族自治州概況』雲南民族出版社。

西双版纳年鑑編輯委員会 1997 『西双版纳年鑑 1997』雲南科技出版社。

玉康、岩罕、張秋生編著 2000 『漢傣字典』雲南民族出版社

中共西双版纳州委党史征集研究室編 2000 『西双版纳五十年 1950-2000.2』雲南民族出版社。